

# 「曠野」論 覚 書

— 女の「不為合せ」と末尾の文章をめぐる —

山 本 裕 一

中で、「『今昔物語』の作品の中にある或不幸な女の話」と語られ、また、その成立事情を書いたとされる「十月」のなかでは次のように述べられている。(注五)

それは一人のふしあはせな女の物語。自分を与へ与へしてゐる  
ちにいっしか自分を神にしてゐたやうなクロオデル好みの聖女と  
は反対に、自分を与へれば与へるほどいよいよはかない境涯に墮  
ちてゆかねばならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。  
さういふ物語の女を見出すと、僕はなんだか急に身のしまるやう  
な気持ちになつた。(傍線山本)

「曠野」は、昭和十六年十二月号の「改造」に発表された、今昔物語集巻第三十「中務太輔娘、成近江郡司婢語第四」と伊勢物語の類話に材を採った、原典(今昔)のほぼ二倍の長さを持つ短編(注一)である。この作品は、従来、堀のリルケ的テーマの完全な形象化のみられる(注二)王朝物の棹尾を飾る作品として評価され、通説化されてきた。また、原典との関係については、「ほとんど原典にしたがってかかれてゐる」(注三)という見方が一般的であつた。

しかし、近年、原典との詳細な対照、成立事情についての詳しい考証、他の作品との対比による作品の検証(注四)などの視点から、一個の作品としての研究が進み、その中から前述の通説への批判もなされるようになり、また、原典とされる作品の他に、多くの作品が影響を与えていることも指摘されるようになった。

ここでは、それらの論文を参考にしつつ、この作品の主題について考察し、その結果から改めてこの作品を、堀という作家の文学活動の中で見直していきたい。

この作品については、昭和十六年十月二十四日付堀多恵子宛書簡の

この中で語られているクロオデルの作品「マリアへのお告げ」については、同じ「十月」の五日前の記述で「惜しげもなく自分を与へる余りの純真さ、さうしてゐるうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤」に感動しながらも、「彼女を孤独にし、ああも完全に人間性を超越せしめ、それまで彼女をとりまいてゐた平和な田園生活から引き離すことがどうあつても必然だつたのであらうか」と「その結末の神への賛美のやうなもの」を「異様なもの」に思い出している。つまり、傍線部に見られるやうな自らを投げ出して生きる純真さを、信仰によって現実生活を超越したものと

てではなく、あくまで、人間的な不安な生活の中で描こうとしたのである。かなり後のものではあるが、昭和二十一年六月二日付野村英夫宛書簡の中の次のような記述からも、この事は見て取れる。

しかし、「十月」のなかで「マリアへのお告げ」のヴィオレエヌの犠牲の崇高さに感動しながら、同時に何か心情的に反発せずにもゐられなかつたのは、あ、いふ僕の十月的な心境の中での一つの挿話にすぎぬ、「十月」全部を考へて貰つたら、造形美術云々は問題ではなく、「曠野」の女主人公との対比において、その僕の反発が理解されることと思ふ（傍線山本）

このように、「曠野」は、そのふしあわせな女主人公のはかない境界を、現世的な不安な生の中で描いたものであるが、堀は、その本文中で全能者の視点から、女の「不為合せ」を段階的に記述している。

「あの方さへお為合せになつてゐて下されば、わたしは此の儘朽ちてもいい。」

さう思ふことの出来た女は、かならずしも、まだ不為合せではなかつた。（第二章）

此処に、女はまつたく不為合せなものとなつた。（第四章）

この作品の主題が「不為合せ」な女の物語であり、堀がその「不為合せ」について作品内で解説しているとすれば、彼の言う「不為合せ」が、どのようなものであるかを考察することがまず必要であろう。以下、堀のいう「不為合せ」とは何なのかについて考察していく。

## 二

初めの堀の判断が出てくる第二章第一節では、原話では立ち入られなかつた女の心情、特に男を待つ女の心の充実が、日毎に人氣がなくなり、荒れていく館の描写の間にはさみ込む形で、堀の手によって繰り返し書き込まれている。そして、その結論部分として、前述の堀の判断が書かれている。状況説明部分を抄録し、段を下げ、括弧で括つて示すと次のようになる。

（それでも女はなほ男を心待ちにしなが、幾人かの召使ひを相手に、さびしい、便りない暮らしを続けてゐた）

それでも女はまだしもそのなかに（山本注、何物も紛らせではくれない「待つことの苦しみ」をさす）一種の満足を見出し得た。

（わづかに残つてゐた召使ひも誰からともなく暇をとり出しみな散り散りに立ち去つて往つた。／一年ばかりのあとには、

女のもとにはもう幼い童が一人しか残つてゐなかつた）なれば傾いた西の対の端に、わづかに雨露をしのぎながら、

女はそれでもちつと何物かを待ち続けてゐた。  
（最後まで残つてゐた幼い童もとうとう何処かに去つてしまつた。）

しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を欠くことが多くなり出してゐた。——それでもなほ女はそこを離れずに、何物かを待ち続けてゐるのを止めなかつた。

「あの方さへお為合せになつてゐて下されば、わたしは此の儘朽ちてもいい。」／さう思ふことの出来た女は、かならずしも、まだ不為合せではなかつた。（傍線等山本）

傍線部に見られるように、周りの現実が厳しくなればなるほど、女

は「待つ」ことの「苦しみ」の中に満足を見出し、それを支えとしており、そのことが何度にもわたる「それでも」で強調されている。最後の感懐は、そうした漸層的な表現に続いており、そのような状況の中、彼女を支えていた考えと考えるとよからう。それに対し、堀は、右のような判断を下している。彼女は最愛の夫と別れ、生活に窮乏している。にもかかわらず、「かならずしも、まだ」不為合せでないというのであれば、自己を犠牲にすることで男を幸福にするという考えのもとに、彼女が「待つ」ているところを評価したのである。

しかし、彼女が「待つ」ことをやめ、弱くなってしまう後でも、堀は何もコメントを加えておらず、「真に不為合せ」と断ずるのははるか先である。だとすれば、彼の評価の対象は「待つ」行為そのものでなく、その奥にあるもっと深い心情にあるのではなからうか。

このことについて考えるためには、女の「待つ」行為の意味をもっと少しい部分で考える必要がある。そこで、女の待っていたものは何であったのかについてまず考えてみる。

第二章において女は男の来訪を受ける。以下はその時の描写である。

女は急に手足が疎むやうに覚えた。さうして女は殆ど我を忘れて、いそいで自分の小さな体を色の褪めた蘇芳の衣のなかに隠したのが漸つとのことだった。女には自分が見るかげもなく瘦せさらばへて、あさましいやうな姿になつてゐるのがそのとき初めて気がついたやうに見えた。たとひ気がついてゐたにせよ、そのときまでは殆ど気にもならなかつた、自分のさういふみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待つてゐた男に見られることが急に空怖ろしくなつたのだつた。(傍線山本)

本文中に「そんなになつてまだ自分の待つてゐた男」とあるように、

女が待つていたのは本来男であつたはずであり、その男の到来は最も願わしい現実であるはずである。しかし、女は自分の惨めな姿を男に見られることを恐れ、身を隠している。つまり、女は単に男と逢うことを待つていたのではないのである。また、傍線部を見れば、それまで女が現実を目を向けず、自らの思念の中にだけ生きていたことも明白である。だとすれば、彼女が待つていた「何物か」とは、男との間に以前のような付き合ひが取り戻されるという夢想ではなかつたか。このことは、第一章からもうかがうことができる。

第一章は二つの別れ話を中心に構成されている。その最初のもは、原典の別れ話を整理したもので、その会話は原典のほとんど直訳といつてもいいものである。

「(前略)父母のをりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調へしてさし上げられてをりました。けれども、かう何かと不如意になつて来ましては、それも思ふにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思ひもなされることがおありでございませう。ほんたうに私のことなどは構ひませぬから、どうぞあなた様のお為めになるやうになすつて下さいませ。」

これに対して、二回目の別れ話は全くの堀の創作で、そこには原典の女よりも更に追い詰められた、孤立した女の心情が描かれている。先の引例と比べてみて欲しい。

「いつまでもかうしてわたくしと一緒にゐて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくなりました。わたくしはかうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのお褒れになつたお姿を見ることが出来ませぬ。のみならず、この頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考へに

なっていらいつしやるのでせう。なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです。」(傍線山本)

傍線部を見ると、女は、けつして単に「献身的、没我的」なわけではないことがわかる。父母が死んだ今となつては、男に他に通うところが出来るのは、仕方のないことである。その事は女も重々承知している。さきに「ほんたうに私のことなどは構ひませぬから、どうぞあな様のお為になるやうになすつて下さいませ」とまで語っているのがその証拠である。それにもかかわらず、ここで女は「なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです」と男を詰問している。ここには、男への愛情から身を引こうとした初めの決意とは相反する、あくまで男との間に強いつながりを持ち続けたいという心の動きが見てとれる。

女がそのような考えをもっていたとすると、男のやつれた姿を見たくないという彼女の言葉は、つまり、男をやつていない姿で見たいということであり、二章の、自分の惨めな姿を男に見られないという態度と考え合わせると、女は現実を受け入れず、自分が男の世話をしていた昔の状況を強く思慕しているように思われる。女が望んでいるものは現状ではかなえられない夢であり、女はその夢を追うことで孤独へと自分を追い込み、二人の生活に破綻をもたらししているといえよう。このように見て来ると、この作品は、その内なる欲求の強さ故にロマネスクな心情に苦しむ点において、前作「菜穂子」の三村夫人や菜穂子に通じる人物造型なのである。(注六)

堀がここで描こうとしたものは、冒頭(本論文の一)で述べたように、人間性を逸脱しようとする愛や犠牲精神ではない。自らを犠牲にしてまでも、その愛を貰こうとした女の激しい生の希求なのであり、また、苦悩であろう。

さて、ここで再び、二章に戻って考えてみよう。以下は、先にあげた、女が男の来訪に驚く文章の少しあと、男が立ち去った後の女の心

情の描写である。

すべては失はれてしまつたのだ。男は其処にゐた。其処にゐたことはたしかだ。それを女にたしかめでもするやうに、男の歩み去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛の網が破れたままいくすぢか垂れさがつて夕月に光つて見えた。女はその儘荒らな板敷のうへにいつまでも泣き伏してゐた。……(傍線山本)

たずねて来た男が立ち去り、二度と男と逢えなくなったことに對して、女は「すべては失はれてしまつたのだ」という感懷を抱き、板敷に泣き伏している。男の幸せが第一義の問題であつたなら、男との別れは、すべてを失つたことにはなるまい。また、たとえ、姿を隠したにしても、自分の望んだ通り立派になつたか男を一目みたい、見て、自分の考えの正しかったことを確かめ、その心をなぐさめたいと考えるのが自然ではなからうか。男が幸せかどうかも確かめず、ひたすら身を隠し、このような感懷を抱くとすれば、「あの方さへお為合せになつてゐて下さればわたしは此の儘朽ちてもいい」という自己犠牲に基づく献身的な考えは女の本当の望みではない。女のあまりに激しい生の希求が作り出した自己欺瞞なのである。この時、もし失われたものがあるとすれば、後に書かれているように「いつかは男に逢へる」という思いであり、つまりは、男との生活があるべき姿で取り戻せるという夢想であろう。現実の自らの姿を認識した時に、女はその本当の望みをあきらめた。そして、その結果、「待つ」ことが、意味をなさなくなつたのである。

女の「待つ」行為とそのよりどころとなつていた考えをこのようにとらえる時、二度目の別離による女の変化は、夢想に生きていた彼女が、現実へと目を向けざるをえなくなつたという事にほかならない。

そして、その後も残る何かがあるとすれば、それこそが、堀が女の中に見出した、「不為合せ」でない要素である。それは何であろうか。いまさらの感もあるが、私は、それを生の希求すなわち現実の生に満足せず、より高き生を生きんとする姿勢ではないかと考えている。そのことは、たとえば、三章の次のような表現にもうかがわれよう。

女はそれを強ひられる儘に、京を離れるのはいかにもつらかつたけれど、しかし、自分の余りにもつたなかつた来しかたに抗ふやうな、さうして何か自分の運を試してみるやうな心持ちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下つていった。

(傍線山本)

確かに、「待つ」ことを諦めた後の女は、男への愛という生きがいを失って「もう以前の女ではない」。意志も弱くなって、郡司の息子に養われることを一時は否みながらも、やがて男を通わせる。しかし、堀はそのような女に、自分の身が「いとほしくていとほしくてならぬいやうな」気位を失わせてはいない。また、引用の傍線部分を見れば、女が単に運命に翻弄されているわけではなく、現状に悔しい思いをしながらも、妥協せず、現実の中に働きかける意志を失ってはいないことがわかる。女は、それゆえに、なお「不為合せ」とは言い切れないのである。堀がこの女で描こうとしたものは、夫への愛というものでなく、その奥にあるこのような心情ではなかったらうか。

### 三

次に二度目の堀の判断について見ていく。

現実を直視することを余儀なくされた彼女は、やがて「いかにも悔やしい思ひ」をしなから、近江の国から上京した郡司の息子に身を許

し、彼とともに近江に下る(第三章)。しかし、その男には国元に妻がおり、女は婢として扱われる。そこに、女は近江での再出発という最後の望みを失い、「すべての運命がそこにうち挫かれた」と感じる(第四章第一節)。以下はそれに続く部分である。

が、一月たち二月たちしてゐるうちに、(中略)空虚な気もちのする日々が過ぎされた。いままでの不為合せな来しかたが自分にさへ忘れ去られてゐるやうな、——さうして、そこには、自分が横切ってきた境涯だけが、野分のおとの、うら枯れた、みどころのない、曠野のやうにしらじらと残つてゐるばかりであった。

「いつそもうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも考えるやうになつた。

此処に、女は、まったく不為合せなものとなつた。(傍線山本)

ここで注意すべき事は、先に要約した、男の来訪以後の彼女の運命は、どれ一つとっても、それだけで「不為合せ」とするに足る内容であるにもかかわらず、堀は、郡司の息子の裏切りを知ってから二月という長い期間を置いた後に初めて「此処に、女は、まったく不為合せなものとなつた」という判断を下していることである(傍線部参照)。「不為合せ」とは現実での挫折——夫との離別や郡司の息子に裏切られたこと(外的条件)ではない。女が人生に絶望し、能動的に働きかけをする氣力を失つたこと(内的な変化)に対する堀の判断である。生涯を「曠野」と感じ、「誰にも知られずに一生を終へたい」という考えに陥った女は、国司の召しを受けた時、いくらでも相手をさげすめた以前とは違い、「いいなりにならう」としてゐる自分が何だか自分でもさげすまずにはゐられないやうな「無性にさびしい気もち」(傍点山本)を抱いている。そこでは、もはや女は運命に身をまかせており、氣位をも失っている。その状態が「不為合せ」なのであ

る。つまり、堀が問題にしているのは、運命に抗う姿勢なのだ。

自らを犠牲にするほど激しく生を希求した女が、自己を喪失するという「不為合せ」に陥っていく姿が、この作品の主題として描かれていることは、ここまでの考察で明らかである。そして、それならば、そのようなものとして女を描くことが堀にとってどのような意味があったのかが問題になる。しかし、このことについては、ここまでの部分で結論を出すのは早計であろう。やはり、佐藤藤正氏が「この終末の場面を描く切迫した作者の語調、文体の突出部ともいうべき部分に、この作品のすべては賭けられていると言つてよい」(注七)と述べておられている末尾部分の解釈を踏まえた上で考えねばなるまい。この小説は、氏がいうように、堀には珍しいパセティックな文体で最後の女主人公の死の場面へと収斂されている。堀は、男の限らない女への愛を全能者視点から描き、女は「一度だけ目を大きく見ひらひて男の顔をいぶかしさうに見つめ」る姿を目撃者視点から描くにとどめられている。そこに描かれたものは原典とも、同じ原典によつた滝井孝作の「中務太輔の娘」(注八)とも異なつた堀独特のものであり、この終末部分に堀の主題につながるものがあると考えるのは妥当であろう。しかし、再び女の心理が語られず、その外見で象徴的に描かれているため、末尾の描写は、そこに「われわれの生はわれわれの運命より以上のものである」という「風立ちぬ」以来の主題の「完全な形」での「形象化」を見る谷田昌平に代表される解釈、それに対し、末尾二行の表現から疑問を発し、そこにはや男の想いを受けとめえぬ「生と愛との荒涼たる終息」を見る大森郁之助の解釈、自己自身への「自愛的な恍惚」「自他合一の共時的エクスタシー」を見る竹内清己の解釈などさまざまな解釈を許すものとなつていて、見解が定まらない。そこで、私は今回見て来たような「不為合せ」という観点から見た場合、末尾がどのような意味を持つものなのか私見を述べてみたい。問題となる末尾の文章とは、以下に挙げるものである。

「しつかりしてゐてくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、この女ほど自分に近い、これほど貴重なものはゐないのだということがはつきりと身にしみて分かつた。さうしてこの不為合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じような詮らめて身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出来た唯一の不為合せであることをはじめて悟つたのだつた。しかし、女は苦しうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさうに見つめたぎり、だんだん死顔に変わりだしてゐた。……

もはや黙つて宿命に身をまかせて生きることしかできなくなつてゐる女にとつて、男との再会はどのような意味を持つのだろうか。

すでに二章において、女は、愛に殉ずることなく、「すべては失はれてしまつた」と、男への愛を諦めているのを見て来た。しかも、彼女が自分の生涯を「曠野」と感じるようになるのは、ともに近江にくだつた郡司の息子の裏切りからであつて、最初の男への愛が「彼女の奥深くに沈めてしま」われ、『生命』そのものとなつて、彼女の「生」への意志を支えているとする谷田昌平氏(注九)のように考えにくい。もちろん、不在による愛の高揚というテーマは後期の堀の作品の中によく見られるものであり、この作品にそれが無いとは言ひ切れない。しかし、この女は、新しい夫を迎え、その男との生活に賭けて下つていたのであつて、なお残る純粋な愛情の存在は考えにくい。さらに、このことについては、末尾二行の「いぶかしさうに」という表現が、「相手が誰なのか判つても尚残る別な不審であり」「たとえ旧の夫でも合ふされた激情は理解し難い、ということではなければならぬ」「理解し難さを表出したこととされるのだから」「曠野」の女主人公の愛は再会の段階で遂に発現することのないものに成り了せる、そういう愛なのである。」という大森論文の指

摘もあり、愛した男との再会というところに、女の喜び（愛の再燃）や幸福を見ることには抵抗がある。

では、この女には救いはないのか。大森氏が指摘されているように、この作品には、堀文学の愛と生の荒涼たる終息が描かれているのか。このことを引用部分から読み取ってみよう。

引用に先立つ部分で、男の「矢張りおまへだつたのか」という声を聞いて、女は男の腕から逃れようとする。その後女はなお二回「力のかぎり」「なほも必死に」男の腕から逃れようとする姿を書かれている。この激しい希求は、もはや生ける屍となり何物にもいいなりとなっていた女の、与えられた苛酷な運命に対しての最後の力を振り絞つての抗いであろう。少なくとも、この時、女は自己を喪失した「不為合せ」なものではなく、そこには、一章で男から身を隠したのと同質の激しさが、わずかな時間ではあるが甦っている。そして、女は苦しさに男に抱かれたまま、「一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさうに見つめて力尽きるのである。」

この「いぶかしさう」という表現に着目し、大森氏は、「理解し難さを表出したことでとされるのだから」、女の側に「夫の側と類似した感情はまったく生じていない」とする。私も基本的にはそれに同意である。しかし、この末尾の表現のうち「見つめる」という行為の方にこだわり、女の激しさが甦っていることを頭において別な観点から見ると、もう一つの解釈が可能なるように思われるのである。

女は、国司となつた昔の男をみつめていた。そして、その目は大きく見開かれている。ただ、運命を呪い、我が身を嘆くばかりで、もはや男に何も思う所がないのなら、男を見つめることはない。そこに何かを見出そうという気持ちがあるからこそ、「いぶかしさうに」疑いながらも、なお見つめるのではなからうか。大きく見開かれた眼はその希求の強さを物語っているようにも思われる。

では、女は何を男に見出そうとしているのか。それは、女の一生が、決

して徒勞ではなかったことの証明ではなかったか。大森氏の言うように、男との間に愛情の再燃はみとめにくい。しかし、その男を自分を犠牲にしてまで愛した事実は消えはしない。出世した男を見ることは、その当時の願いが、立派に達成されたことの証明であり、女の生涯が、けっして自らの思っているような見どころのない曠野ではなかったことの証明でもある。昔の夫との再会は、曠野に一条の光をさしたのではなからうか。

女は、背負われた抗いがたい運命の前に何も信ずることができなくなっている。もはや、この女には、どのような「為合せ」もあり得ない。それならば、たとえそれが女には信じ切れないとしても、その最期の時に自分の生が徒勞でなかったことを示してやることは、女に対して与え得る最高の幸福ではなからうか。それを祝福とは言えないまでも女の生に対して注ぐ堀の目は暖かい。

#### 四

私は、ここまで「不為合せ」という点から、「曠野」の主題とその末尾の女の姿の解釈についての私見を述べてきた。次に男の側から、最期の場面の意味について考えてみたい。この小説において、原典にはほとんど示されていないこの男の心理などに、堀は多く加筆している。明らかに堀は、この男に何らかの役割を与えようとしているのである。その役割とは何であらうか。

女との再会において、男は、当初、女が旧の妻であることに気付いていない。したがって、女への愛情が持続していたとは考えられない。また、女は「行きずりの男に身をまかせろ」ように身をまかせているのであって、男がその女の中に自分への愛情を見出し出したとも考えにくい。にもかかわらず、男は末尾において、「自分に近い」「貴重な」「漸つと

いま自分に返されたこの女」「自分のめぐりあふことの出来た唯一の為合せ」と女のことを慕い、激情を示す。この激情は何に起因するのだろうか。

男は、女の「自分のことに構はずに、己のことばかり構はうとしてゐる」心情を窮屈と感じ、女のもとを去っている。そして、女恋しさに何度か女を訪れようとするが、「何物か」にはばまれて、女から遠ざかる。しかも、意を決して女を尋ねた時にさえも、女を諦めると、女恋しさを瞬時に「言いしれず昔なつかしいやうな、殆ど快い物思ひ」に変えている。男は、誠実さを繰り返して強調されてはいるが、何一つ女のような純真な心を持って行動していない。それどころか、女の愛情の強さをうけとめる心の広さを持たず、負担に思っているのである。

また、男は、女と別れた後、国司にまでなっている。世間的な意味では十分に「為合せ」な環境にいる。にもかかわらず、女との出会いを「唯一の為合せ」と感じている。だとすれば、「為合せ」とは、やはり、その生き方に対する評価で、女とともに生きた日々を「為合せ」と感じているのである。女が男と別れて後、生涯を「曠野」としか見ることができない事態に陥ってしまったのと同様に、男も女と別れた後に「為合せ」を感じられなかったというのである。

再会に至る男の心情をこのようにとらえるならば、男が最期に激情を示していることは、女を眼前にした時、女と別れて以来の「不為合せ」な日々の中に、女との思い出を対置し、当時には負担に思うばかりで気付かなかつた、女の純真な生の貴重さをはっきりと認識したことにほかならない。「漸つといま自分に返された」女「はじめて悟つたのだつた」という記述はそうした男の心情から生まれているのではなからうか(傍点山本)。それは、女との再会によって、初めてもたらされた魂の目覚めであり、その心情の吐露の激しさは女の真摯な生が男へと受け継がれることの証左であろう。堀は、女の生の意義を、女の生に接した男の魂の高揚によって間接的に示している。男の役割とは、そのようなものでなかつたか。

たか。

堀は早く昭和十年一月発表の「山茶花など」において、登場人物に「菜穂子」を思わせる作品の構想を語らせているが、その中で、女主人公が自分を理解されないことに苦しんだ挙げ句、死んでしまうという結末について述べた後、次のように語っている。

しかし、その人の一生は無駄だつたらうか? それも一つの美しい生涯だつたらうちやあないか? 私はそれを信じたいのだ。……それで私はその人の物語を描くとしたら、それにかういふ結末を与へたかつたのだ。そのひとが死んでから、それまでその人の気持ちなんぞ少しも理解しやうともしないやうな男だつたその夫が、いつか知らず識らずの裡にその人の不為合せだつた事に気がつき、自分が苦しめてゐたその妻をだんだん心から愛し出してそのため自らは反つて為合せになつてゆく——と云つた、そんな心の目ざめを描きたいと思つたのだ。

これは直接「曠野」について書かれたものではないが、この文章に、堀が「曠野」の男を描いたことの意味が表わされているように思われる。女の生が無駄でなかつたと「信じたいのだ」といった堀の生への信頼は、この物語の女の生とその最期に示されていた。そして、堀は、それだけではなく、男の「心の目覚め」を描くことで、女の生の意義を間接的にも証明しようとしているのである。(注十一)

「曠野」末尾において描かれたものは、現実の圧力に屈した女の最期であつた。そのようなものとして女を描くことは、「われわれの生はわれわれの運命より以上のものである」という課題を作品の中に求め続けた堀にとって現実に対する「さびしい詮め」(注十二)であつたにちがいない。しかし、このことは否定的な意味にはかりとることではできない。現実を直視し、根源的な生の探求を続けていくかぎり、



理想的な状態は望めない。この作品のように現実に押しつぶされてしまふこともあるだろう。だが、堀は、そのような場合にも、宗教に頼ることはなく、たとえどんなに苛烈な運命のもとにおかれようと、あくまで現実の不安の中で、日常に埋没してしまうことなく自己の生を高揚せんとする人物を描いている。そして、その最期において女の生に報い、男の目覚めを描くことで女の生に意味を見出している。この作品に描かれたものは大森氏や竹内氏の言うような「われわれの運命より以上の」生という課題からの後退や変容ではない。現実の厳しさを認めた上でのさらなる課題の追求、逆説的肯定であって、次作「ふるさとびと」へとひきつがれていくものなのである。

注一 吉田精一「堀辰雄と王朝女流日記」

(昭和三六年十月至文堂刊『現代文学と古典』所収)

注二 谷田昌平『堀辰雄——その生涯と文学——』「恋する女」

(昭和三十年十二月、青木書房より刊行)

注三 谷田昌平「堀辰雄と日本古典」

(昭和三十年十月角川書店刊『近代文学鑑賞講座』⑭所収)

注四 特に参考にさせていただいたものを列挙する。本文中では、煩雑になるのを避けるため、多くは著者の名のみで記した。

長谷川孝士「堀辰雄『曠野』に関する考察——『今昔物語集』

の原話との比較を中心として——」

(愛媛大学紀要一三 昭和四二年十二月)

大森郁之助「『曠野』論への序——成立課程の虚実を発端として——」

(日本近代文学第一四集 昭和四六年五月)

(「十月」と書簡の比較から、成立事情を考証、「十月」の信憑性について疑義を提起する他、さまざまな指摘をなされている)

竹内清己「『曠野』——エクスタシーの達成——」

(千葉大学教養部研究報告 昭和五六年十二月)

(「六の宮の姫君」との対比、折口信夫の民俗学への接近という観点より、論を展開されている。)

松本典枝「堀辰雄論 『曠野』と『六の宮の姫君』との比較

を中心に」(玉藻第二十号 昭和五九年十二月)

中島昭「堀辰雄『曠野』試論——『伊勢物語』との関連を中心

に」(国語と国文学 昭和六十二年十二月号)

(ジイド・伊勢物語などの日本古典の影響を論じられている。)

注五 昭和十八年一月、二月『婦人公論』に発表

角川書店版「堀辰雄作品集第六・花を持てる女」(昭和三年四月刊行)のあとがきに、「この短編を書くまでの心境は「十月」の中に書いた」との発言がある。

なお、本文の引用は「曠野」「十月」他、すべて筑摩版堀辰雄全集により、漢字は現行の字体に変えた。

注六 たとえば、前作「菜穂子」を単行本に収録する際、その背景として読まれるために改作された「楡の家」第一部には、次のような文章が見られ、他者の憔悴に苦しみ、また、他者の目に写る自らの姿に苦しむという発想が本文中の引用と共通している。

あの方は驚くほど憔悴なすつてゐられるやうに見えた。そのお瘦せ方やお顔色の悪いことは私の胸を一ぱいにさせた。(中略) 私の寝た様子があの方をも同じやうに悲しませてゐるらしいことをやつと気づき出した。私は心の押しつぶされさうなのをやつと耐へながら表面だけはいかにもの静かな様子を伴つてゐた。(山本注 三村夫人が森と再会する場面)

また、前作「菜穂子」の主人公菜穂子は、発病によって、

夫のもとから抜け出し、療養所に入り、孤独の中に「生の愉しさ」を味わう(一八)。その時彼女は、「もう少しの辛抱……もう少しの……」と何の根拠もなく自分に言いまかせている。それは、「曠野」の女が男と別れて「何か」を待ち続けているのと同様であり、明の訪問などにより、菜穂子がその不毛に気づき、そこから現実へと目を向け出す所も、「曠野」の女が、男の訪問により自らの姿に気づく所と類似している。このことと、後述する「山茶花など」の叙述を考えあわせると、その執筆時期の近いこともあって、「曠野」を「菜穂子」に続くものとして読むことが可能ではないかと思われる。つまり、「菜穂子」末尾の予見を引き継ぎ、現実の中で展開したものととして、「自分を与へ与へ」する「曠野」の女の生を考えるのである。

注七

佐藤泰正「作品研究の方法と実際——その一つのメモ『曠野』をめぐって——」(『国文学解釈と鑑賞』昭和五〇年七月)

注八

大正十年十二月『表現』に発表

注九

前出、谷田昌平「恋する女」(注二参照)

注十

前出、大森郁之助「『曠野』論への序」(注四参照)

注十一

「菜穂子」の圭介は、菜穂子の病氣のことを母が他人に話していることを知って、突然菜穂子のが気にかかり出し、菜穂子の何かをこらえるような「うつむき顔」を思い出す。

(十)そして、たまらなくなつて療養所を訪ね(十一)、家に帰る気にならず、銀座をさまよう(十二)。そして、彼は、「何物かに引き摺られていく」心持ちで家に帰っていく。

「曠野」の男は、女のもとへ行こうとしても「何物かに阻まれるやうな心もち」になつて別の女の家へと引返す。ふと、女の袖を顔にした、さびしい、「俯伏した姿」を思い出すと、「女恋しさにゐてもたつてもゐられ」なくなつて、女

を訪ねる。

両者は、ともに女を恋しく思いながらも、現実に瞞著せられてゐる。この両者の類似は、男を圭介の後身と考えることを可能にするように思われる。そして、両者を比べてみると、そこに堀文学の一つの変容を認めることができる。「菜穂子」では、菜穂子は確かに圭介に何かを求めており、圭介も菜穂子との交渉の中で変わりつつあった。しかし、「曠野」の女は、この論文で述べて来たように男の愛を求めてはおらず、男は女との再会によつて、目覚めるのである。「菜穂子ノオト」に記された「夫婦愛の誕生」のテーマは、すでに、この作品において、「目覚め」のテーマへと変質している。

注十二「『死者の書』古都における、初夏の夕暮れの対話」

『婦人公論』昭和十八年八月号(第二八卷第八号)発表

— 平成三年九月三十日 受理 —